

## 巻頭言

春の穏やかな光が降り注ぐ中、「学苑」第九百六十五号をお届けする。本号は論文六本、資料一本、注釈一本、研究ノート一本に研究余滴、新刊紹介を織り交ぜた多彩で充実した内容である。

昭和女子大学が創立一〇〇周年を迎えた昨二〇二〇年は、新型コロナウイルス禍ではじまり、年が明け年度末が近づいても未だ終息の兆しがみえない。この一年は通常とは異なる状況であったが、学部・学科紀要、特集号、研究所紀要、普通号の各号を粛々と発行し、月刊誌としての「学苑」刊行の最後の年度を、この三月号を以って締めくくる。新年度からは装いを改めて、季刊「学苑 昭和女子大学紀要」を刊行する。

一九三四年十一月の創刊以来、戦争中の用紙統制期、戦後五年間の休刊期を経て復刊、誌面の体裁、掲載内容も時代の要請に即応しながら、「学苑」は息の長い刊行を続けてきた。筆者は恩師、故保坂都先生（本学の前身、日本女子高等学院第二期生・日本文学科（現、日本語日本文学科）名誉教授）から、「紀要が月刊誌として発行されているのは、東大と國學院と昭和だけです。」と、「学苑」の特色と意義をうかがった。先生は「学苑」創刊号の編集人でもいらしたから、本誌の誕生に立ち会った生き証人でもあったことになる。毎号掲載された錚々たる学者・研究者による論文や含蓄あるエッセイは学生の心に深く刻まれ、先輩の秀逸な論文を食い入るよう読み、刺激を受けたものだと回顧される方もあり、本誌の果たしてきた教育的役割が偲ばれる。筆者も学生時代は、「学苑」掲載論文をレポートや卒業論文を書く時の参考にしたが、この冊子体の中に、論文や研究データを蓄積し形にする上での幾多の困難や編集の苦労が秘められていることなどは知るよしも無かった。ご指導を経て活字になった拙稿が掲載された「日本文学紀要」をはじめて手にした時の喜びは忘れられない。最初の一步の証を得ることは、研究者の誰しにも共通する緊張と充足であろう。

近年、研究成果の発表舞台は紙媒体だけでなく多様化しつつあるが、「学苑」は本学の学術研究の根幹を支える学術雑誌として、発表の場を提供する使命を担ってきたし、それは、一〇一周年目を新たにスタートした今後も変わらない。この節目に、これまで八十七年の長きに亘り、「学苑」を支え、学究の灯を継承し、発行に尽力されてきた全ての方々からなる敬意と謝意を表す。

新約聖書・ヨハネによる福音書・8章32節の一文

「また眞理を知らん、而して眞理は汝らに自由を得さすべし」

は、われわれ研究者の共有する道標、使命ではないだろうか。この眞理探究の営為が「学苑」に満ち渡り、「知の蓄積」が継続されることを願ってやまない。

（近代文化研究所長 鳥谷知子）